海外研修　様式第２号

2024 年　 5 月　 11 日

武蔵野美術大学　学長　殿

海外研修報告書

下記の通り、海外研修の報告をいたします。

記

氏名	川名　晴郎	所属	日本画学科研究室
		職位	助教

研究課題	スイス・フランス・イタリアの美術および建築について
研究先機関	
主な滞在地（国・都	フランス・パリ、フランス・ニース、イタリア・フィレンツェなど
渡航日程	2024 年　3 月　31 日　～　2024 年　4 月　25 日（　 26 日間）
研究目的・理由	日本画は明治以降、常に東アジア絵画を軸としながらもヨーロッパからの多大な影響を受けて変化を続けてきた。今回の研修では、その影響源であるヨーロッパの美術や建築を視察し、空間表現などを学ぶことを目的としていた。
研究成果発表予定（展覧会、著書、論文発表等）	今回視察したことを咀嚼し、絵画を制作したい。またそれらの作品を個展またはグループ展で発表予定。

研究内容	今回の研修では、古代から 20 世紀までの幅広い年代の造形表現を美術館などで視察するとともに、フランス各地に点在するル・コルビュジェの建築を見学した。結果としてヨーロッパにおける美術史をなぞるような行程となったので、非常に大まかではあるが作品が制作された時系列に沿って振り返りたい。 【絵画】 絵画に関しては主に空間表現に着目して鑑賞した。 ローマ近郊のタルクィーニアで見られる紀元前 5 世紀のエトルリア人の墓地遺跡内の壁画（写真 1）や、ルーブル美術館で鑑賞したエジプトの壁画（写真２）では奥行きなどの空間表現はほぼなく、壁面に平面的なモチーフが描かれている。 写真 1 写真 2

研究内容	一方、ローマ国立博物館で鑑賞した壁画群（紀元前１世紀ごろ、写真３・4）は進歩的なギリシア美術からの影響が色濃く、陰影や隈取りなどの立体表現や空気遠近法的な描画がすでに見られる。 写真３ 写真４ しかしフランス各地の都市またはフィレンツェ、ローマの美術館で鑑賞できるルネサンス以前のキリスト教美術（フレスコ画・テンペラ画など：写真 5）では一度また平面的な表現に戻るように見受けられた。 金箔地を背景に配置される人物像は平面的であり、立体感や奥行の表現ではなくキリスト教の物語を民衆に伝えることに主眼が置かれているように思われる。

研究内容

写真 5

こうした中世のキリスト教絵画は時代が降るにつれて徐々に空間の意識が出てくるように思われた。例えばフィレンツェのウフィツィ美術館で展示されているチマブーエ（1272 年～1302 年）の聖母像（1290 年ごろ、写真 6）は全体として平面的ではあるが、台座には透視図法的な立体感がある。

そういった流れの中で、大きな変化が見られるのはジョット（1267 年ごろ～1337 年）の絵画においてである。同じくウフィツィ美術館所蔵の聖母像（1310 年ごろ、写真 7）はチマブーエの聖母像と近いスペースに展示されていたため、より空間意識の変化が比較しやすかった。背景が金箔地であることは共通しているが、天使たちの重なりによる奥行きの表現、聖母の表情や衣服の自然さにおいて大きく異なるような印象を受けた。

写真 6・7

研究内容

フラ・アンジェリコ（1395～1455、写真 8）やフィリッポ・リッピ（1406 年～1469 年）らの絵画において空間意識はより形を変え、奥行きをもった空間の中に人物が存在するという実感が強まっていく。

写真 8　サン・マルコ修道院（フィレンツェ）の壁に描かれた『受胎告知』(1440-45 ごろ)。
※階段を昇った先の高い位置にあり、見上げるような形で視線が自然と画面内の天使から聖母へ向かうように感じられた。

研究内容	そしてルネサンス期の諸作品において透視図法を用いた空間は自然さを増し、写実的な表現という意味ではほぼ完成しているように感じられた。 特にダ・ヴィンチ（1452〜1519）の絵画（写真 9）では空気遠近法やぼかしが効果的に用いられ、画面内で空気感が統一されているような実感があった。 これには油絵というメディウムの影響も大変大きいと思われる。ウフィツィ美術館やルーブル美術館では膨大な所蔵品を制作年に沿って鑑賞したが、フレスコ画やテンペラ画が大半を占めていた時代の展示室から、ダ・ヴィンチの油絵がある展示室へ移動した際に、明らかに油絵のペースト状の質や光沢が空間の自然な表現に寄与していると感じられた。 写真 9　『受胎告知』（1472-5 年） 写真 5〜9 の作品は全てフィレンツェ滞在中に鑑賞したものであり、同地における中世からルネサンスへ至る時期の芸術活動の隆盛を改めて実感することができた。 他方､ルーブル美術館やオルセー美術館などを中心としたパリでの視察では 16 世紀以降、20 世紀に至る多様な作品を実見することができた。 遠近法というルールに則って空間内に人物や建築を配置していくルネサンス絵画に対し、16〜18 世紀の絵画は油絵というメディウムの用法を拡大しながら、より感情や人体の動き、光など動的な要素が加わっていくような印象を受けた。 （↓写真 10・11）

研究内容	しかし非常に巨大なルーブル美術館やオルセー美術館内の収蔵品を鑑賞していくと、16〜18 世紀の展示の多くを占めるサロン系絵画の作品群は、絵画空間や画題という意味では非常に保守的に思えた。そのような流れの中で印象派以後の絵画を鑑賞すると、その前衛性が理解できる。 （写真 12・13：モネのルーアン大聖堂の連作とその部分） 写真 12 写真 13 16〜20 世紀前半の絵画のコレクションとしては、やはりパリの美術館が質・量ともに圧倒的であった。 オルセー美術館は主に後期印象派までの年代を扱っており、ある意味では広く知られる美術史通りの展示がなされていた。 （写真 14・15）

研究内容	 写真 14　ゴッホ『ローヌ川の星月夜』1888 年 写真 15 セザンヌ『カード遊びをする人々』(1894-95 年) 一方ポンピドゥー・センター内にある国立近代美術館では、非常に多角的な展示によって 20 世紀初頭の絵画運動が検証されていた。 セザンヌからピカソ・ブラックのキュビズムへ、といった単線的な歴史だけではなく、同時代に各地でそれぞれの画家たちによって行われていた実践を幅広く紹介しようとする意図が感じられた。(写真 16・17) 20 世紀初頭、よく知られる巨匠の活動だけでなく、いかに様々な地域で古典的な絵画空間が解体しようとする運動が勃発し、お互い影響し合っていたかということが非常によく理解できる展示であった。

研究内容	 写真 16　イタリアの作家　アルベルト・マグネッリの作品（1914 年） 写真 17　ロシアの作家　ナタリア・ゴンチャロワの作品（1909-10 年） その他、ベルン（スイス）のパウル・クレー・センター、ボローニャ（イタリア）のモランディ美術館など、画家の出身地に設立された美術館では日本ではあまり見られない量のコレクションを実見することができた。詳細な略歴や、画材・アトリエの保存と公開など、出身地ならではの細やかな紹介が行われていた。 （写真 18～23）

研究内容

写真 18：パウル・クレー・センター外観

写真 19：クレー初期の水彩作品

写真 20：クレーが実際に使用していた画材

研究内容	 写真 21：モランディ美術館 写真 22：モランディの作品 写真 23：同じくボローニャ市内に保存されているモランディのアトリエ内

研究内容

【建築】
今回の研修では絵画の展示を主として鑑賞すると同時に、フランス各地に点在するル・コルビュジェの建築もいくつか実見することができた。
コルビュジェは日本のモダニズム建築にも多大な影響を及ぼした建築家であるが、初期は画家として活動し、また建築家として有名になった後も絵画制作は継続していた。
上述したポンピドゥー・センターの常設展においても、キュビズムや抽象絵画との影響関係を示すような文脈でコルビュジェの絵画（写真 24）は建築模型と一緒に展示されていた。現地で建築を見学する際には、コルビュジェの絵画に見られる造形的な要素、とくに水平・垂直と生物を参照したような有機的な形の関係に注目して視察した。

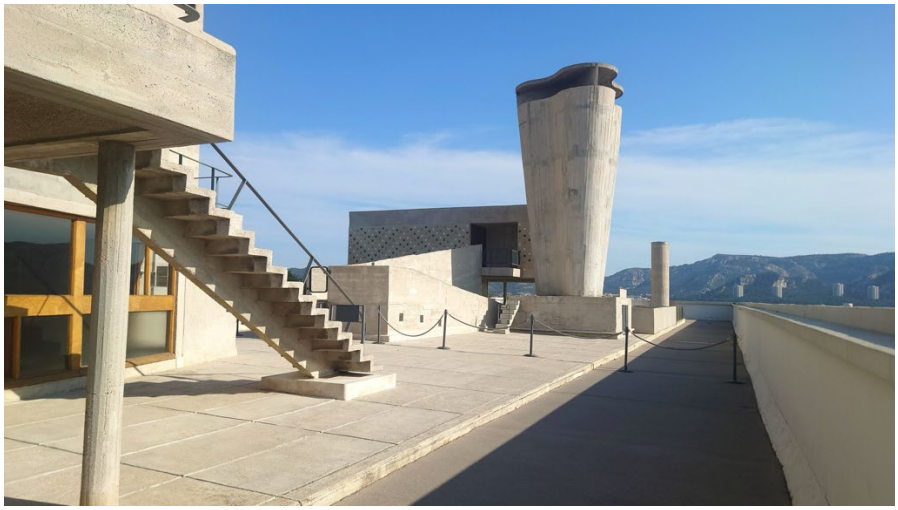
視察した建築は以下の通りである。

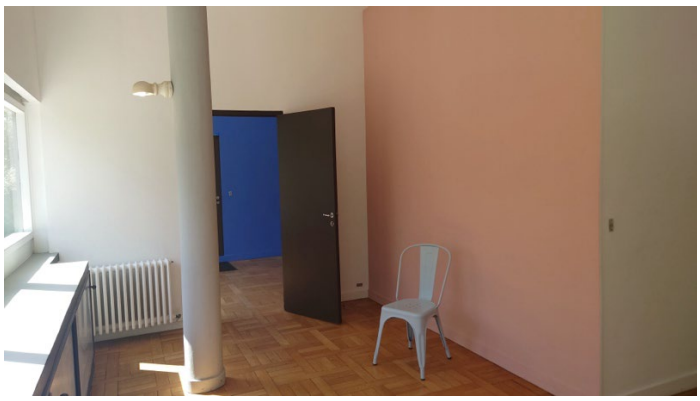
・サヴォア邸（1931 年/写真 25・26）
・ラ・ロシュ＝ジャンヌレ邸（1924 年）
・ロンシャンの礼拝堂（1955 年/写真 27）
・ラ・トゥーレット修道院（1959 年/写真 28～30）
・マルセイユのユニテ・ダビタシオン（1952 年/写真 31・32）
・カップ＝マルタンの休暇小屋（1952 年）

写真 24：コルビュジェの絵画
『Nature morte du Pavillon de l’Esprit Nouveau』（1924 年）

研究内容	 写真 25：サヴォア邸外観 写真 26：サヴォア邸内部 写真 27：ロンシャン礼拝堂外観　東面は工事中

研究内容	 写真 28：ラ・トゥーレット修道院外観 写真 29：ラ・トゥーレット修道院　入り口付近 写真 30：ラ・トゥーレット修道院　礼拝堂内部

研究内容	 写真 31：ユニテ・ダビタシオン外観  写真 32：ユニテ・ダビタシオン屋上 写真 33：ユニテ・ダビタシオン内部　巻貝のような照明が印象的

研究内容	コルビュジェの絵画では、絵の具そのものはベタ塗りに近い。写実的な空間を持つ油絵のように半透明の絵の具を何層も重ねていくような方法は採用されておらず、平滑に塗られた面が重なり合うような構造をとっている。 しかし実見した際には、ごく浅い奥行きを持った半透明の画面という印象を受けた。これは描かれているモチーフの多くが内側に空間を持った瓶などであり、またモチーフ同士が重なっていながらお互いを貫通するような描き方をされているためだと思われる。 この印象は建築作品にも通じるものであった。コルビュジェの建築ではしばしば壁面がデ・スティルからの影響を感じさせる原色または柔らかなパステルカラーで塗装されている。 建築内を歩き回ると、ドア越しに、またはガラス越しに手前の空間と奥の空間が同時に見える。人が移動すれば、様々な色や表面を持つ壁面・床・柱などがその都度違う重なり方をすることになる。 また水平・垂直というフレームに対して、丸い柱や生物から着想を得たような有機的な形がところどころに現れるため、硬直した印象は受けない。 例えばサヴォア邸の内部では、壁が柔らかいピンク色に塗られた部屋のドアの向こうには奥の部屋の青い壁面が見え（写真 34）、少し移動すれば別のドアの向こうに螺旋階段の有機的な形が見える、といった光景の切り替えが次々と起こるが、その光景の一つ一つにはコルビュジェの絵画作品に通じるような感覚があった。  写真 34　サヴォア邸内部 写真 35　サヴォア邸内部

研究内容	建築の内部を見学することで､伝統的な空間をいかに解体していくかという 20 世紀初頭の絵画の実験から影響を受けつつ、それを建築という空間内で実践したコルビュジェの造形感覚を体験できたように思う。 【おわりに】 今回の研修の目的は、日本画に様々な形で影響を与え続けているヨーロッパの美術を実際に体験することであり、ある一つのテーマに沿って集中的に視察するのではなく、現地で見られるものをなるべく多く見ることに重点を置いていた。 結果的に非常に多くの絵画や建築を鑑賞することができたが、各作品について詳細に研究するような余裕はなかった。 幸い、国内では「日本の中のマネ」展（練馬区美術館、2022 年）など、西洋美術が明治以降の日本でどのように受容されてきたか検証するような試みが多数行われている。 今回の滞在の記憶が薄れないうちに、次は日本での受容の形や影響を調べることで、日本の画家たちの作品についてもより実感を伴った理解ができるのではないだろうか。 日本の美術は明治以降、常に西洋美術からの強い影響を受けながら存在しており、それは 21 世紀の今も同様である。かつての画家たちがどのように西洋美術を受容し何を考えたか知ることは、現代で制作を行なっていく上でも重要だと考えている。

大学授業における研究成果の還元	今回視察したことを元に、絵画を制作し個展またはグループ展で発表予定。そういった活動や研究内容を発信していくことで、学生へも研究成果を還元したいと考えている。

研究日程（全滞在期間）

出発日（現地時間）	出発地（国・都市名）	到着日（現地時間）	到着地（国・都市名）	研究内容等	滞在日数
3/31	日本・東京	4/1	スイス・ベルン	パウル・クレー・センターを視察	2
4/2	スイス・ベルン	4/2	フランス・パリ	モロー美術館、ルーブル美術館、オルセー美術館、オランジュリー美術館、ポンピドゥー・センター、サヴォア邸などを視察	5
4/7	フランス・パリ	4/7	フランス・ディジョン	ロンシャン礼拝堂を視察	1
4/9	フランス・ディジョン	4/9	フランス・リヨン	シュヴァルの理想宮 ラ・トゥーレット修道院を視察	2
4/10	フランス・リヨン	4/10	フランス・アヴィニョン	グラネー美術館、アルル市街 アヴィニョン旧市街など視察	3
4/13	フランス・アヴィニョン	4/13	フランス・ニース	シャガール美術館、ヴァンス礼拝堂、ユニテ・ダビテシオンなどを視察	3
4/16	フランス・ニース	4/16	イタリア・ジェノヴァ	カップ・マルタンの休暇小屋 ウフィツィ美術館 サン・マルコ修道院 モランディ美術館などを視察	5
4/22	イタリア・ジェノヴァ	4/22	イタリア・ローマ	バチカン美術館 ローマ国立博物館 タルクィーニアのエトルリア人墓地などを視察	3
4/24	イタリア・ローマ	4/25	日本・東京		
備考	計画書提出後に旅程を追加したため、当初予定していた 21 日間から 5 日間延長し、26 日間の滞在となった。				

以上

※　欄が不足する場合は、適宜、行を挿入するなどして記入してください。別紙添付も可。
※　その他特記事項等がある場合は、備考欄に記入してください。